

## 言語変化と文法化についての一考察

高橋 光子

### 1 文法化 (Grammaticalization) について

「文法化 (grammaticalization)」の研究は近年広く行われており、言語の意味変化を扱う主要な研究分野となっている。Heine, Claudi and Hünemeyer (1991); Traugott and Heine (eds.) (1991); Lehmann (2002); Hopper and Traugott (1993) 等の研究では、grammaticalization という術語の定義や歴史をはじめ、具体的な言語分析に基づく文法化の要因や度合いや指標などが論じられている。

「文法化」の概念そのものは非常に古くからあるようである。例えば、抽象的な文法的意味を持つ語は具体的な語彙の意味を持つ語から派生すること、すなわち虚辞 (empty symbols) は、かつては実辞 (full symbols) であったという議論が13-14世紀の中国にある。18世紀のフランスでも Condillac や Rousseau が抽象的な語は歴史的に具体的な語から派生したと述べた。例えば、時制接尾辞のような動詞の屈折は、歴史的に自立語から派生したという。

18-19世紀の Horne Tooke や Humboldt の研究では、名詞や動詞は必須語 (necessary words) と呼ばれて必要不可欠な品詞である一方、副詞や前置詞や接続詞はその必須語 (necessary words) から生じていること、前置詞や接続詞は物を指し示す実語 (real words) が起源であること、さらに言語の元の状態は「具体的」で「抽象的」な事象は具体的な事象から生じていることなどが議論されたようである (Heine, Claudi and Hünemeyer 1991)。

19世紀前半の Bopp も、具体的内容のある語彙から助動詞や接辞へと発展したことを数多くの例によって示した。さらに Schlegel は、言葉はその意味内容を剥ぎ取られながら言語の中での変化を促されると述べ、現代の文法化の議論のさきがけとなった (Heine, Claudi and Hünemeyer 1991)。

文法化 (grammaticalization) という術語は、20世紀初め頃のフランスの言語学者で社会学部論叢 第27巻第1号

ある Meillet の造語であるという。Meillet は、言語変化の理論の中心的分野として「文法化」の重要性を認識したと言われている。Meillet は、類推的イノベーションによって新しい文法的な語が形成されることや、表現性の喪失 (loss of expressivity) が文法化のプロセスの中にあることを指摘した (Hopper and Traugott 1993)。表現性の喪失は語の意味的・語用論的性質が失われることと関係している。それは語の意味が形骸化して内容を喪失することや、語用論的に役立つものであった語が、文法化の進行と共にその語用論的機能を失うことを表す。

文法化がメタファーと関わりを持つことは、多くの先行研究の中で指摘されている (Hopper and Traugott 1993; Heine, Claudi and Hünemeyer 1991等)。通常は、二つのもの間に類似性がある場合はメタファー、近接性がある場合はメトニミーと呼ぶが、これら二つを合わせた上位概念としても「メタファー」という術語が使われる。全く異なる二つのカテゴリーの間に類似性や近接性が見出される時、そこにはメタファーがある。

文法化の良く知られた特性は、抽象的な文法的意味を持つ語は具体的な語彙の意味を持つ語から来ているということであるが、元の具体的な語と、そこから派生した抽象的な語の間の概念内容は全く異なっており、品詞も異なるのが通常である。しかし、メタファーは概念間の距離を全く問題としないため、特に、文法化の初期の段階で、メタファーが働くと考えられる。Hopper and Traugott (1993: 78) は、次のように述べた。

...early grammaticalization is also strongly motivated by metaphoric processes.  
(初期の文法化もまた、メタファーのプロセスによって強く動機づけられている<sup>1)</sup>。)

メタファーが語の意味変化に主要な役割を果たすことは伝統的に良く知られているが、文法化もまたメタファーによる強い誘因が働いているのである。人間は具体的で物理的なものを概念化するだけでなく、非常に多くの抽象的で心理的・精神的なものを概念化する。そして、具体的で身体的な領域の経験を基に、非物理的で抽象的な領域の経験に意味づけが行われる。メタファーは抽象的な領域の経験に言葉を与えて概念化するための言語的手段であり、抽象的な概念は全てメタファーによって理解されるとも言われている (Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1987)。

文法化を誘導するメタファーのプロセス (metaphoric processes) について、Hopper and Traugott (1993: 77) は、次のように説明した。

Metaphoric processes are processes of inference across conceptual boundaries, and are typically referred to in terms of “mappings,” or “associative leaps,” from one domain to another. The mapping is not random, but motivated by analogy and

iconic relationships.

(メタファーのプロセスとは、概念領域を超えた推論のプロセスであり、典型的には一つの領域から別の領域への「写像」または「連想の跳躍」という言葉で表される。その写像はでたらめではなく、類推や類似関係によって動機づけられている。)

例えば、アフリカのEwe語に、「子供」を表す名詞が「小さい」という属性を表す派生接尾辞へと文法化した例がある(Heine, Claudi and Hünemeyer 1991: 79)が、元の名詞から派生接尾辞への概念写像はでたらめではなく、「子供」の典型的な属性である「小さい」という意味が派生接尾辞へと写像されたのである。

Hopper and Traugott (1993: 41)によれば、英語の接尾辞の *-hood*, *-dom*, *-ly* は、元々、状態 (condition), 状態や領域 (state, realm), 体や類似 (body, likeness) を表す名詞 (full noun) に由来するという。名詞から接尾辞への文法化を経た後も、これらは元の名詞の意味を残している。そのため、これらの接尾辞が他の名詞に付くと、例えば、*childhood*(子供時代) は *condition of a child*(子供の状態) の意味に、*freedom*(自由さ) は *realm of freedom* (自由の領域) の意味に、そして *manly* (男らしい) は *likeness of a man* (男に似ていること) の意味になる。

このように、具体的な語彙的意味を持つ語から抽象的な文法的意味を持つ語が現れることは良く知られた文法化の特性である。しかし、これは、文法化の諸特性の中の一つの特性に過ぎない。文法化は、言語の音声・音韻や形態面にも影響を及ぼす。音声・音韻面における文法化の特性について、Heine, Claudi and Hünemeyer (1991: 214) は、次のように述べた。

The phonetic substance of a grammaticalized form tends to become reduced and/or assimilated to its environment.

(文法化した形態の音声的実体は、削減されたり、隣接音に同化したりする傾向がある。)

Heine, Claudi and Hünemeyer (1991: 233) は、文法化のプロセスを言語的実体の喪失 (loss in linguistic substance) として特徴づけ、文法化は音韻的実体の喪失 (loss in phonological substance) へ向かうと考えた。

Heine and Kuteva (2007: 34) は、次のように、磨滅 (音声的削減), すなわち、音声的実体の喪失を文法化の指標の一つとして挙げた。

Parameters of grammaticalization

...erosion ("phonetic reduction"), i.e. loss in phonetic substance

(文法化の指標

磨滅 (「音声的削減」) すなわち、音声的実体の喪失)

音声的実体の喪失は、同時に形態的実体の喪失を伴う。Heine and Kuteva (2007: 43-44) は、形態的磨滅と音声的磨滅の両方が非常に多くの場合に含まれると述べた。例えば、英語の *because* が話し言葉で *coz* となると、2音節から1音節へと音声的・形態的な単位が削減される。形容詞の *full* から派生接尾辞の *-ful* への文法化では、形態的削減と共に、強勢 (stress) の喪失も見られる。*By the side of* という句から *beside* という前置詞へ、*by cause of* から *because (of)* への文法化においても形態的・音声的磨滅の両方が含まれる。

Lehmann (2002: 113) も、音韻的・形態的実体の喪失について、次のように議論した。

Phonological attrition is the gradual loss of phonological substance. ...this may also lead to the loss of segments; then the result is, of course, that the sign becomes shorter.

(音韻的摩耗は、音韻的実体が徐々に喪失することである。…これはまた、分節の喪失を引き起こすだろう。その結果、当然、記号は短くなる。)

Lehmann (2002: 113) は、ラテン語の *ille* からフランス語の *le* へ、印欧祖語の *esti* から英語の *is* へ音韻的・形態的に縮約されたことを例に挙げた。そして、音韻的摩耗が言語変化に遍在するのは明らかであると述べた。

このように、「文法化 (grammaticalization)」は歴史的な言語変化であり、音声や形態や意味面において、その実体が喪失して抽象化していくという特性を持つ。

## 2 イノベーション (造語) と共時的文法化

文法化の発端となるのは、個人の創造的な言語使用の結果であるイノベーション (造語) である。そのイノベーションが個人的なレベルのものにとどまらずに、社会的な拡散 (diffusion) が行われた場合には「共時的文法化」と言うことができる。通常、ある語がイノベーションによって造られたことを示すのは難しいと言われている。しかし、文学作品上に現れた新語 (造語) の場合は、その起源を作品や作家にまで遡ることができる。Takahashi (2011a) は、日本語の副詞の「決して」について、そのイノベーションの詳細を明らかにした。こういったイノベーションは、他の作家や作品にも例がある。

共時的文法化は、具体的な意味を持つ語から抽象的な意味を持つ語が造られることであるが、このような造語は多くの種類の造語の中の一つである。すなわち、具体的な意

味を持つ語から別の具体的な意味を持つ語への造語や、抽象的な語彙素から具体的な語への造語もある。

さらに、共時的な文法化を遂げた語であっても、その後の通時的な文法化のプロセスを踏まない語がある。それは、次の世代へ継承されずに、一時代で廃用になってしまった語、次の世代へ継承され、幾世紀もの間、存続してきたにも関わらず、その意味をほとんど変化させない語などである。

通時的な文法化のプロセスは、具体的な語彙の意味を持つ語から抽象的な文法的意味を持つ語が派生し、ひとたび文法化した後もさらに抽象的な文法的機能を獲得していく幾世紀にもわたる言語変化である。Matisoff (1991: 383) は、その文法化の現象を私達は見ることができるとして、次のように述べた。

Grammat (ic[al]) ization is inherently a diachronic concept. It refers to a historical semantic process whereby a “root-morpheme” with a full *lexical* meaning assumes a more abstract *functional* or “grammatical” meaning. Such processes may take centuries to complete, but this does not seem necessarily to be the case. We can see grammaticalization phenomena occurring rapidly before our eyes in any language we choose.

(文法化は本質的に通時的な概念である。それは完全な「語彙的」意味を持つ語根形態素がより抽象的な「機能的」・「文法的」意味を帯びる歴史的な意味変化を表す。そのような変化は完了するのに何世紀もかかるかもしれないが、必ずしもそうではない場合があるようである。どの言語でも目の前で文法化の現象が急速に起こっているのを私たちは見ることができるのである。)

つまり、具体的な語彙の意味を持つ語から抽象的な文法的意味を持つ語への文法化の現象は、まずは、共時的な次元で起こることである。具体的な内容語から抽象的な機能語を派生させるイノベーションと、そのイノベーションの言語共同体への定着は文法化の共時的側面であるが、この種の文法化は私達が見ることのできるものである。

「新造語」は日常的に絶えず数多く行われている。しかし数多くの新造語が生まれる中で、慣習化して言語共同体の中で広く使われるようになるのはほんのわずかであり、たいいてはその場限りのままで終わってしまうものや、その時の文脈のみでしか使われないものの方が多い (Naumann 2000; 石井 (訳) 2008)。

つまり、文法化の第一段階は、具体的な語から抽象的な語を派生させる造語から始まるが、文法化によって生じた多くの造語の中で、言語共同体の中で受容されて定着するのは、そのうちのほんの一部であるということである。共時的な文法化は、個人による創造性が社会の中で共有されることであるが、そのプロセスのほとんどは、まだ明らか

になっていない。Heine, Claudi and Hünnemeyer (1991: 32) は、この点に関して、次のように述べた。

Most likely, the process of grammaticalization starts with individual creativity, which, in specific instances, leads to communal creativity, with both being influenced by universal strategies of conceptual manipulation. However, the exact way in which these different kinds of creativity contribute to and interact in this process is still largely unclear.

(文法化のプロセスは個人の創造性から始まる可能性が最も高い。それは、特定の場合に共同社会の創造性に至るが、これらは共に概念操作という一般的な方法に影響を受けている。しかしながら、これらの異なる種類の創造性が文法化のプロセスに寄与し、作用する正確な方法は、まだ大部分が不明である。)

その一方、歴史的な文学作品の中には、当時の言語共同体の中で受容されて一般的になり、共時的変化を遂げたと思なされる新語が見出されるものがある。一人の作家の創造的な言語使用によって新しい語や語義が生み出され、一般大衆の共感を得て受容され、定着するのである。

岡村 (1997) によれば、新語は、大きく分類して日常的新語と文学的新語の二つに分けることができるという。日常的新語は、ある対象を明確に指示し、必要に応じて生まれて多くの人々に使われるが、必要がなくなると消えていく種類の語である。これに対し、文学的新語は特定の作家により造られるもので、その作品に生彩を添え、辞典の中に収録されるほどに一般化する種類の語である。

日常的新語は作り手が特定化できない場合が多いのに対し、文学的新語は作り手がその作者に特定できる。

例えば、Bradley (1924: 231) によれば、シェイクスピアは *out-* を含む合成語動詞を好んで造り、それらの多くは現代英語に残されているという。

Shakespeare seems in truth to have had a curious fondness for the invention of compound verbs with *out-*, expressing the notion of surpassing or exceeding. All the words of this kind that exist in modern English appear to have been either framed by him, or by later writers in imitation of his example.

(実際、シェイクスピアは、「凌ぐ」「優る」の意味を表わす *out-* を含む合成語動詞を造ることを妙に好んでいたようである。現代英語に存在するこの種の単語は、すべてシェイクスピアの造語か、ないしは後世の作家がこれを模倣して造ったかのいずれかである (寺澤 (訳) (1982: 242)。)

ミルトンが造った新語・新語義で、現在の英語に残されているものもある。例えば、現代英語の *pandemonium* (大混乱・修羅場) は、元々はミルトンが地獄の首都を表す固有名詞として造語したものが一般名詞化したものである。*gloom* (暗闇・陰鬱) や *anarch* (国を無秩序に陥れる者) もミルトンに由来するという。

*Pandemonium*, invented by Milton as the proper name of the capital city of Hell, the general place of assembly of the devils, is now freely used without any allusion to its literary source (Bradley 1924:234) .

(ミルトンが造語した *Pandemonium* は、今日ではその出典の意識なしに自由に用いられている (寺澤 (訳) (1982: 245)。)

*Gloom*, in its modern sense of 'darkness,' may probably be his invention (Bradley 1924: 233).

(今日用いられる「暗闇」の意味での *gloom* はミルトンの創案と言ってよいであろう (寺澤 (訳) (1982: 245)。)

That Milton had a genuine faculty for word-making, even though he chose to exercise it sparingly, is sufficiently proved by his invention of *anarch* to describe Satan as the essential spirit of anarchy (Bradley 1924: 234).

(ミルトンはその造語能力を控え目にしか用いようとしなかったが、それが正真正銘のものであったことは、擬人化した *Chaos* (混沌) を指す名詞として *anarch* (国を無秩序に陥れる者) を創造したことで十分に証明されている (寺澤 (訳) (1982: 245)。)

同様に、キャロルもまた多くの言葉を造語したと言われている。その中で、*chortle* (声高に歌う) や *galumphing* (意気揚々と闊歩する) などは、現在の英語にまで伝えられている。

Many excellent examples of intentional root-creation may be found among the invented words (not intended to be permanent additions to the language) in Lewis Carroll's *Alice in Wonderland, Through the Looking-glass, and The Hunting of the Snark*. These clever coinages derive their effect partly from their suggestion of obscure reminiscences of existing words, and partly from real phonetic expressiveness. Two of them, *galumphing* and the verb *to chortle*, have come into pretty general use, and have found their way into our dictionaries (Bradley 1924:

159).

(意図的な語根創造の適例は、英国の数学者、ノンセンス作家ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) の『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』、『スナーク狩り』の中に出てくる新造語に多く見出すことができる。しかしこれらの語は、本来一時的な造語として作られたものである。キャロルの巧みな造語のもつ効果は、それが既存の語を漠然と連想させることと同時に、その音声の持つ実際的な表現力によっている。その中の二つ、chortle (声高に笑う) と galumph (意気揚々と闊歩する) とは鞞語あるいは混成語の好例といえよう。chortle は chuckle (くつくつ笑う) と snort (鼻をならす) とを絶妙にかけ合わせたものであり、galumph の方は gallop in triumph (勝ち誇って疾駆する) を巧みに暗示している。この生き生きとした二つの鞞語はその後広く一般化し、辞書の中に取り入れられることになった (寺澤 (訳) (1982: 169-170)。)

このように、新語や新語義が生み出され、それらが出版等によって拡散することで、共時的变化を遂げ、さらには通時的变化を経て現在まで継承されるということが、数は多くなくても、確かに存在するのである。

ある個人の造語が、その言語の基本的な語彙の一部となった他の例には、ティンダルの *scapegoat* (贖罪の山羊, 身代わり) がある。

Perhaps the most admirable product of Tindale's talent for word-making is *scapegoat*, which, though suggested by a misinterpretation of a Hebrew proper name, is a singularly felicitous expression of the intended meaning, and in figurative use has proved a valuable addition to the language (Bradley 1924: 222-223).

(ティンダルの造語力から生まれた最もすばらしい例は、*scapegoat* (贖罪の山羊, 身代り) に帰すべきであろう。これは実はヘブライ語の固有名詞の誤解に基づくものだが、意図した意味をまことに見事に訳出している。その比喩的用法を通じて、英語に貴重な一語を加えることになった (寺澤 (訳) (1982: 233)。)

上述した英語の語彙は、その由来が過去の作家に遡れることを確認でき、共時的变化と通時的变化を経て現在に至るものである。

ある個人の造語は一般に他者がそれを取り入れ、かつ言語社会すべてに広がって定着した時に「言語変化」に値するものとなる。Labov (1994: 45) は「他者によってその変化が言語の一部として受け入れられなければ実際にはその言語は変化しない」と述べ、Hopper and Traugott (1993: 38) も「個人からグループへ広がった時に変化と認めるのが方法論的に好ましい」と述べた。個人の造語は言語社会に普及して初めて「言語変



化」になるのである。そして、最も好ましい社会言語学的文脈が与えられれば、その新造語は言語社会に普及すると言われている。

言語の中に深く組み込まれて、後世に受け継がれていくような言葉は、多くの造語のうちの一部であり、過去の文学作品で生み出され、その時代に使われたとしても、通時の変化を経ることなく、使われなくなった言葉の数は多い。ある時代に具体的な語から抽象的な語が派生し、その派生語が共時的文法化を経た場合でも、その派生語が歴史的な年月を経て、さらなる通時的文法化を進行させていくような語の数は限られたものであると考えられる。

### 3 言語変化と通時的文法化

文法化は歴史的な言語変化の一種であり、文法化した語というのは幾世紀にもわたる通時の変化を経たものである。具体的な意味を持つ語を基に、抽象的な意味を持つ派生造語が造られ、共時の変化を遂げて社会に定着し、次の時代に継承される語は少なからず存在する。その中で、通時的文法化を進行させる語は、その後の時代に継承されつつ、数世紀に亘る歴史的な変化の中で、さらに抽象的な機能語へと変化していく語のことである。

例えば、英語の副詞の *hardly* は、そのような通時の変化を経て文法化した語である(高橋 2014)。 *Oxford English Dictionary* (2009) によれば、 *hardly* は10世紀頃から使用され続けて現在に至っている。 *Hardly* は16世紀後半を最後に、副詞としての抽象的な語義は派生させず、17世紀に合成語形容詞の接頭辞になった。

*Oxford English Dictionary* (2009) に掲載された用例の中で、 *hardly* の形態の変化を見てみると、古英語の時代は *hærdeliche*, *hardeliche*, *herdeliche* などの綴りで10個程のアルファベットで成り立っていたが、中英語では *hardelye*, *hardely*, *herdely* のような綴りになり、アルファベット数は7～8個へと削減した。そして1600年代以降から現在までは全て *hardly* という綴りで、そこには6個のアルファベットしか使用されていない。このような歴史的変化は、音韻的・形態的実体が徐々に喪失していく通時的文法化の特性を表している。

*Hardly* の歴史的な意味変化については、語彙的意味の希薄化・漂白化という特性が示されていた。古英語の時代の *hardly* は戦争の場面で使用され、「獐猛に」、「凶暴に」、「激しく」、「猛然と」のような意味を持ち、戦う人の猛烈で凄まじい様子などを表した。中英語の時代になると *hardly* の意味は「確実に」、「きっと」、「間違いなく」、「必ず」のような意味へと変化し、話者の確信した様子などを表す副詞となった。そして現代では「非常に困難でほとんど～できない」、「なかなか～できない」という否定副詞の意味・機能を担うものとなった。

また、各種辞典や用語集の *hardly* の用例からは、 *hardly* の新しい意味・用法が現れ

た後も古い意味・用法がしばらく生き残っていること、新旧の複数の層が一つの時代(段階)に共存する「重層化の現象」が起きていることが示されていた。

*Oxford English Dictionary* (2009) によれば, *hardly* は, 1600年代頃から動詞由来の形容詞の前に付いて合成語形容詞を造るための拘束形態素となった。その例を挙げると, 次のようである。

- hardly-acquired (入手困難な)
- hardly-earned (汗水たらして取った, せっかく取った)
- hardly-labouring (ほとんど働かない)
- hardly-rendered (ほとんどない)
- hardly-removed (外れにくい, 抜けにくい)
- hardly-used (ほとんど使われない)

*Oxford English Dictionary* (2009)

上記の *hardly-* は, 副詞としての自立性を喪失している。それは語幹である形容詞があって初めて使用することのできる拘束形態素にすぎない。このように, 副詞としてのカテゴリー性や自立性を喪失し, 合成語形容詞を造るための拘束形態素となったことは, *hardly* の通時的文法化が非常に進んだことを表す。

Hopper and Traugott (1993: 13) は, 自立語としてのカテゴリー性を喪失して接辞へと変化することを, 次のように一般化して示した。

word > affix > phoneme  
(語 > 接辞 > 音素)

*hardly-* は, 動詞由来の形容詞の前に付いて, 「ほとんど～(動詞)できない」のような意味を造り出すための接頭辞の働きをしている。このような「接辞」は「語」よりも抽象的で, より, 文法的な機能を果たすものである。

このように, 文法化の通時的プロセスは, ひとたび文法化したあとも, さらに抽象的で文法的な意味・機能を獲得していく言語変化なのである。そして, 典型的な文法化の例は, 通時的な文法化のプロセスの中で文法的な機能を担うようになると共に, 語彙的な意味内容は「空」にされていくものである。

言語の中の文法的な機能には限りがあるため, その機能を担う言語要素にも限りがある。抽象的で文法的な機能を担うための言語要素として存在するための空隙や必要性があるところに, ひとたび文法化した語がさらに抽象的で文法的な意味・機能を獲得するべくその空隙の中に入っていくと考えられる。

このように、*hardly* の歴史的変化においては、さまざまな通時的文法化の特性（語彙の意味の希薄化や漂白化、重層化の現象、音声的・形態的実体の削減、さらに抽象的な文法的機能の獲得など）が現われているのである（高橋 2014）。

#### 4 イノベーション、言語変化、そして文法化との間の関係

言語使用者は、意識するとしなずに関わらず、新語や新語義を生みだしている。造語はさまざまな形態素を利用して新しい事物や状況を表わす言葉を作るという個人の言語使用の創造性が顕著に現れるものであり、さまざまな方向への「変化」を示す。

また、造語は既存の言語要素を用いて新しい言葉を作ることであり、有限の形態素をさまざまに工夫して用いながら無限に変化する状況や事物の意味をうまく表現するという動機づけのある言語使用である。もし、新しい事物・新しく具体的な事象・新しく抽象的な心的事象などの意味を表わすために全くの新しい音の連続体である言葉を作り出していたら、語彙数は無限に増えていき、恣意的な意味の語彙が多くなってしまふ。一方、造語ならば、通常、有契性のある言葉であり、その意味を理解することは容易である。

抽象的な形態素から具体的な語が造られる場合もある。例えば「超-」という文法的な接辞を使って「超（暑い）」のように語彙的な副詞を造った場合である。これは、より抽象的な形態素を基にして具体的な語を造るという意味では、「文法化」と反対の方向性を示す。

この他、名詞（愚痴）から動詞（愚痴る）へ、抽象名詞（癒し）から形容動詞（癒し系）へなど、さまざまな方向への「変化」がある。「超-（暑い）」「愚痴る」「癒し系だ」などはいずれも個人のレベルの新造語の範囲を超えて、言語共同体の日本語の中に拡散しているようである。

造語は既存の形態素を利用するため、その元となる形態素との比較において「変化」という表現が使われる。例えば「トラブル（名詞）」から「トラブった（動詞）」へ、「癒し（名詞）」から「癒し系（形容動詞）」へと「変化した」という。しかしながらこの「変化」は元の形態素自体に何の影響も及ぼしていない。ただ既存の形態素を利用した造語が私たちの語彙体系の中に加わっただけである。そのため、語彙の変化は通常、新語や新語義が言語の中へ入ってくることを表す。Fortson (2003: 652) はこの点について、以下のように述べた。

Lexical change is generally used to refer to new words entering the lexicon  
(by borrowing, word creation, or other processes ...)

（語彙変化は通常、（借用、造語、その他のプロセスによって）新語が言語の中に入ってくることを示すために使われる。）

個人の「新造語」は「イノベーション」と呼んだ方が適切である。個人のイノベーションによる新造語が言語共同体の中で共有された時、初めて言語が変化をしたと言えるのであり、共時的変化を経ていないイノベーションは一般的に言語変化と呼ぶことはできない。その語はまだ言語共同体の語彙の中に取り入れられず、その言語共同体の言語に何の「変化」も起こしていないからである。

イノベーションから共時的変化を経るのは、さまざまな種類のものがある。具体的な語を基にして抽象的な語を造るだけではなく、抽象的形態素を基に具体的な語を造ったり、抽象的な名詞を基に形容動詞を造ったりする。具体的な語から抽象的な語へ、抽象的形態素から具体的な語へ、抽象的な語から同じように抽象的な語へと、いろいろな「方向」に変化するのである。具体的な語彙の意味を持つ語を利用して抽象的で文法的な語を造るのは、言語の共時的変化の中の一つの種類である。そして、具体的な語を基に抽象的な語を「派生」させ、その派生語が共時的変化を経た時に、文法化の第一段階である「共時的文法化」が完了すると考えられる。

文法化は通時的な複数の時代に及ぶ言語変化を表わすものである。文法化の第一段階の「共時的文法化」を経て、さらに後世へと継承されるプロセスが文法化の第二段階である「通時的文法化」である。通時的文法化は、その変化の度合いに応じて、さらに第三段階、第四段階等の区分をすることができるだろう。

文法化には「一方向性の仮説 (Heine, Claudi and Hünnemeyer 1991)」がある。これは、具体的に語彙的な意味を持つ語から抽象的で文法的な意味を持つ語が生まれ、その文法的な意味を持つ語が、時代の変化と共に、さらに抽象的な文法的意味・機能を持つ語へと変化することで、その逆は無いという仮説である。

言語変化には、上述したように、抽象的で文法的な形態素から、より具体的に語彙的な語へ「変化」する例がある。このような例は、しばしば、文法化の一方向性の仮説の反例として挙げられることがある。

しかし、抽象的で文法的な形態素から、より具体的に語彙的な語への「変化」は、共時的な次元での変化である。文法化の一方向性の仮説の本当の反例は、共時的変化を経た後の通時的変化の段階で、前の時代よりも常により具体的な意味が後の時代に付与され続けるような変化を示す場合である。文法化と完全に逆方向の例は「抽象的で文法的な形態素」から、「具体的に語彙的な語」へ、さらにもっと「具体的に語彙的で明確な内容を意味する語」へという変化が何世紀にもわたる通時的変化として確認できるような語である。しかしそのような例は、まだ見つかっていない。

Most importantly, however, no instances of “complete reversals of grammaticalization” have been discovered so far (Heine 2003).

(一番重要な点は、「文法化とは完全に真逆」の例は、今までにまだ見つかっていな

いという事である。)

以上のイノベーションと言語変化、及び文法化との関係は、次のようにまとめられる。まず、個人の新造語（イノベーション）は、言語共同体の中での受容・定着の有無によって分けられ、受容と定着を経たものは、「共時的変化」を遂げたもの、すなわち、「言語変化の第一段階」を経たものとみなされる。その「言語変化」には、次の①～⑤のように、さまざまな種類のものがある。これらをまとめると、次の表1のようになる。

表1 言語変化の第一段階とその種類

個人の新造語（イノベーション）→ ×（受容・定着されず）  
 個人の新造語（イノベーション）→ ○（受容と定着：共時的変化）  
 （言語変化の第一段階）

例：①形態素を基に副詞を造語

（「超-」から「超（暑い）」へ）

②名詞を基に動詞を造語

（「トラブル（名詞）」から「トラブった（動詞）」へ）

③抽象名詞を基に形容動詞を造語

（「癒し」から「癒し系」へ）

④具体的な語を基に抽象的な語を造語

（gloom（薄暗がり）から gloomy（憂鬱な）へ）

⑤具体的な語を基に文法的な語を造語

（「重ねる（動詞）」から「重ねて（副詞）」へ）

（文法化の第一段階：共時的文法化）

その他、さまざまな種類の造語が必要に応じて自由に造られる。

創造的な言語使用の顕現。

※文法化は多様な言語変化（①～⑤など）の中の一つであり、上記の⑤が該当する。

次に、共時的変化を遂げた語は、その時代にだけ使用されて後の時代には継承されない語と、後の時代に継承されて幾世紀もの間使用され続ける語とに分けられる。後者が言語変化の第二段階である「通時的変化」を経るものである。その「通時的変化」にはいくつかの種類がある。そのうち、具体的な語に由来する文法的な意味を持つ語が、さらに抽象的な（文法的）意味・機能を獲得するのが「文法化の第二段階」である。この点をまとめると、表2のようになる。

表2 言語変化の第二段階

共時的変化を経た語→ × (後の時代に継承されず)  
 共時的変化を経た語→ ○ (後の時代への継承：通時的変化)  
 (言語変化の第二段階)

## ①語義変化をするもの

(*Pandemonium* : 「パンデモニウム (地獄の首都の名前)」から「大混乱」へ)  
 (*gloom* : 「しかめっ面」から「薄暗闇」へ)

## ②同じ語義を保ち続けるもの

(*owlish* : 1605-1615年に出現して以来, 「(フクロウのように) 賢い」以外の語義を獲得していない。

(*brotherly* : 1000年より前に出現して以来, ずっと「親愛な」の語義を持つ。)

## ③文法的な意味を持つ語が, さらに抽象的な文法的意味・機能を獲得するもの

(*hardly* : 副詞から接辞へ)

(文法化の第二段階：通時的文法化)

表2の中の通時的変化の種類の中で, ②の「同じ語義を保ち続けるもの」は, 語義変化をせずに, 派生した時と同じ語義のまま, 幾世紀もの間使用され続けている語である。これは, 単に歴史的な時間を経ているだけであるが, 通時的変化の中には, このような「ゼロの変化」をするものも含めた。

表1の共時的な言語変化の中の, 具体的な語を基に文法的な語を造語する文法化の第一段階と, 表2の通時的な言語変化の中の, 文法的な意味を持つ語が, さらに抽象的な文法的意味・機能を獲得する文法化の第二段階の両プロセスを経るのが典型的な文法化である。通時的文法化は, ひとたび文法化した後も, さらに抽象的な文法的意味・機能を獲得していく変化であるため, 派生元の語と派生語との意味関係は完全に失われ, その意味は非常に不透明で, 恣意的なものになる。(Takahashi 2011a, 2011b)。

一方, 派生元の語との関係性(類似性や近接性)が派生当時のまま保たれている派生語は, 意味の成り立ちが理解できる派生語である。これらは, 通時的変化に含めたが, 「通時的文法化」のプロセスは踏んでいない。ある共時的体系の言語構造の中で必要とされる文法的意味・機能は限られているため, その空隙を埋める役割を果たす文法的要素の数も限られる。非常に多くの語が共時的文法化のプロセスを踏んだとしても, その後, 通時的文法化を進行させていくのは, そのうちの一部である。共時的文法化を経た語の中には, その後の歴史的变化の中で, もっと抽象的な語義を派生させる語もあれば, 抽象的な語義を派生させず, そのまま, 幾世紀もの間存続する語もあるのである。そのような語は, 通時的文法化を進行させた結果としての恣意性を獲得していないため, 語

源が透明で、元の語との間の有契性が保たれることになる。

## 5 共時的文法化と創造的な言語使用

具体的な言葉から抽象的な言葉を派生させるのは、創造的な言語使用の現れである。派生元の語は、具体的、身体的、物理的な意味を持つ、とても馴染みのある言葉であり、一般の人々にとって、その語が指し示す具体的な物や状況を思い起こすのがとても容易な言葉である。そのように具体的な言葉の多くが、主観的な意味を表す抽象的な言葉を派生させるために使われる。

Lakoff (1989) は、以下のように、人間には概念化の能力があると述べた。

What gives human beings the power of abstract reason? Our answer is that human beings have what we will call a *conceptualizing capacity* (Lakoff 1989: 280). (どうして人間には抽象的に思考する能力があるのだろうか。人間には「概念化の能力」と呼ぶべきものが備わっているからというのが我々の答えだ。)

The idea that people are born with a conceptualizing capacity seems to be the only plausible way to begin to provide answers for all these questions (Lakoff 1989: 335).

(人々は生まれつき概念化の能力を持っているというのが、これら全ての疑問に答えを出し始めるための、唯一有力な方法である。)

新語を派生させるのは、想像力を必要とする人間の優れた能力であり、具体的な意味領域から抽象的な意味領域へのメタファーの写像能力を必要とする。そして派生は、抽象的な意味領域の経験に対する人間の概念化の能力を明示したものであると考えられる。

具体的な意味を持つ語を基にした抽象的な意味を持つ語の派生造語は、共時的な文法化の最も典型的な特性である。名詞や動詞は物理的な物や行為を指し示すという点で具体性があるのに対し、心的状態や性質を表す形容詞や副詞は本質的に抽象的である。そして、後者(形容詞や副詞)のカテゴリーのほとんどは、前者(名詞や動詞)のような主要カテゴリーから派生している。新しい造語は、派生元の語から喚起される内包的意味を主観的に引き出して派生語へと写像することによって作られる。

例えば、*cat* (猫) - *catty* (意地悪) のような、派生元の語と派生語との間にある主観的な結びつきは、それを造語した人の想像力の産物であるが、一般化して英語の語彙の一部となった。*Wake* (目を覚ます) - *wakeful* (油断のない)、*frost* (霜) - *frosty* (冷ややかな) など、派生元の語と派生語とは品詞が全く異なるが、両者の間には類似性

が存在する。派生接尾辞 (-ful, -y など) は、主観的な意味を表す新しい派生語を生み出すための道具であり、抽象的で主観的な意味を写像するための受容体として機能する。*Striking* (目立つ) という派生語は、暴力的なこととは全く無関係であるが、その元となっているのは、*strike* (殴る) である。殴る (*strike*) 行為は、人の心に強烈な印象を与えるため、「注意を引き付ける」、「目立つ」などの主観的意味が派生語へと写像されたのである。また、「泣くこと (*to cry*)」と「緊急の (*crying*)」、「掃くこと (*to sweep*)」と「全面的な (*sweeping*)」、「引き裂くこと (*to tear*)」と「猛烈な (*tearing*)」の間にはメトニミーがある。つまり、泣いている人に対して何らかの緊急の手当てが必要であること、掃いた後の部屋が全面的に綺麗になること、そして、何かを引き裂く時に猛烈な勢いがあることは、通常、経験することであるため、両者の意味は概念的に近接・共存するのである。両者の間の繋がりは経験的な基盤に裏打ちされており、派生元の語から派生語への写像には動機づけを見出すことが出来る。派生語の意味は、派生元の語の特定の側面に焦点を当てることによって自由に造り出される。*Bossy* (横柄な) や *childish* (子供じみた) のような派生語には、感情的に好ましくない含意がある。たとえ、大抵の子供は朗らかで可愛らしく、多くの上司は親切で面倒見が良いとしても、派生元の語の不快な含蓄や悪い性質のみが写像されて派生語の意味となる (Takahashi 2014)。

日本語でも、客観的な事物や自然界の存在物などの言葉を元にして、感情的・主観的・評価的な意味を持つ派生語が造られてきた。「黒」、「赤」といった物理的で客観的な「色」から「どす黒い (声)」、「真っ赤な (嘘)」などの評価的な意味を持つ語が造られ、「泥」、「水」などの自然界の存在物を基に「泥臭い」や「水くさい」といった主観的意味を持つ派生語が造られている。

このように、派生元の語は物理的で客観的な意味領域に属するのに対し、派生語は主観的で抽象的な意味領域に属することが、共時的文法化の大きな特性である。

文法化の第一段階である派生造語は、ある抽象的な認知的内容に対する適切な言葉が何も無いところに言葉を与えようとすることによって動機づけられている。一般的な基本語彙で、その意味や副義が想起されやすい語彙が文法化の対象となる。例えば、主観的で抽象的な意味を表す英語の形容詞は、一般的な基本語彙である普通名詞や動詞から来ており、評価的な主観的意味を表す日本語の形容詞も、多くは非常に一般的な基本語彙を基に造られている。文法化は幾世紀もの年月を必要とするため、現在、既に文法化した語の元の語は、幾世紀も前から存在する語となる。文法化の供給源となった語彙が非常に古いのは、このためである。

文法化は言語構造の外にある力によって引き起こされる。Heine, Claudi and Hünnemeyer (1991: 23-24) は、次のように述べた。



...grammaticalization is initiated by forces that are located outside language structure.

(…文法化は言語構造の外にある力によって引き起こされる。)

人間の言語構造の外にある力とは、言語と外界の世界とを繋ぐ認知能力である。すなわち、全く異なる二つのものの間に類似性や近接性を見出す認知能力としてのメタファー、メトニミー、イメージ・スキーマが、文法化の最初の段階である派生造語の主要な要因であると考えられる。

つまり、具体的な意味を持つ語から、メタファー等の認知能力によって、抽象的な語を派生させることが、文法化の第一段階であり、文法的な意味を持つ語のほとんどは、もともとは具体的な意味を持つ語から派生してできたものである。何らかの抽象的な概念内容に対し、言葉を与えて表現したいという言語使用者の要求を満たすべく、新しい造語が創造的に造り出される。

メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマといったメタファーに関連する現象は、文法化のプロセスの中で、特に、新しい意味を造り出す際の主要な認知的要因となるものである。非常に具体的な物事の中から、想像力によって抽象的な意味を見出し、造語の手続きに則って、その抽象的な意味を新しい形式の中に転移する。造語の手続きは、通常、造語形態素を用いて行われることが多い。例えば、日本語の動詞連用形に「-て」という造語形態素を加えて「-て」形の副詞を造ること、英語の名詞や形容詞に接尾辞の '-ly' を加えて副詞を造ること、その他、いろいろな接尾辞や接頭辞を使って評価的・主観的な形容詞をつくることである。このような造語法は、その言語の語彙を豊かにするために、極めて一般的に行われてきた。

名詞や動詞のような主要カテゴリーに属する語を基に形容詞や副詞のような非主要カテゴリーに属する語を造る文法化の第一段階では、文法化の元の語と文法化した語との間に類似性や近接性の関係があり、メタファーやメトニミーの認知能力が働いた痕跡を見出すことができる。

文法化の全プロセスには共時的文法化と通時的文法化の両方が含まれる。抽象的な意味を持つ語の派生は、文法化の始まりではあるが、もし、それが個人の創造的な使用のみに止まるなら、共時的変化にまでは至らない。しかし、言語共同体の中で人々に受容・共有されると、文法化の第1段階である共時的文法化が完了する。

## 6 文法化の連続性と非連続性

共時的文法化の始まりである抽象的な意味を持つ語の派生は、派生元の語とはカテゴリーを異にするという点において、非連続的である。Pfenninger (2009: 15) は文法化

した語はほとんどの場合、派生元の語とは異なる品詞に属すると述べた。

In most cases the grammaticalizing form will belong to another word class than the lexical item it derives from (Fischer, Norde and Perridon 2004: 10). The concept of decategorialization refers to the loss of grammatical properties associated with the source category, i.e. the shift from one category status to another, correlated with a shift from prototypical membership of a category to less prototypical membership of a new category (Pfenninger 2009: 15).

(文法化した形式は、ほとんどの場合、派生元の語とは別の品詞に属する。脱カテゴリー化の概念は、派生元の語が有していた文法的な属性を喪失することを表す。すなわち、一つの品詞カテゴリーから別の品詞カテゴリーへと転成することである。これは、典型的な品詞カテゴリーから非典型的な新しい品詞カテゴリーへと変化することと関連している。)

動詞や名詞のような主要カテゴリーに属する語彙は、副詞や形容詞といった副次的カテゴリーに属する語を造るために供される。文法化の元となる語と文法化した語とは文法的な属性が全く異なるため、両者の間に連続性はない。このように、文法化の前後のカテゴリーに客観的な繋がりはないのが共時的な文法化の特性である。しかし、共時的文法化の段階では、元の語と文法化した語との間にメタファーの働きによる類似性や近接性の関係を見出せることが多い。そして、両者を繋ぐメタファー的有契性が見出せる時、文法化した語の成立について、認知的要因の説明が可能となる。また、数世紀の時代を超えて、両者が成立時のメタファー的意味関係を持続している場合も同様である。

共時的文法化を経た語が、さらに後世に継承されていく時、通時的文法化の特性が現れる。古い意味・用法は、一つの時代だけでなく、複数の時代に亘って使用され続ける。その間、新しい意味・用法が現れて、新旧の意味・用法が一つの時代に共に使用されるという意味の重層化の現象が起こる。最も古い意味・用法は幾世紀かの時代を経て十分に使用された後で消滅する。こうした通時的文法化のプロセスにおいて、古い意味・用法が徐々に使用されなくなる一方で、より、抽象的で内容が希薄な新しい意味・用法が獲得されていく様子は、漸進的な変化と捉えられる。

そのため、文法化は共時面の非連続的なプロセスと、通時面の連続的・漸進的なプロセスの両特性を合わせ持つのである。

## 7. 結語

文法化はメタファーのような認知能力の働きによって引き起こされる。メタファーは、

非常に具体的な物事から抽象的な意味を連想する認知能力であり、文法化の第一段階である新語を造るために働く。

文法化の元となる語は、その語が表す具体的な事柄を人々に容易に喚起させることのできる語である。すなわち、それは具体性が高く、非常に一般的で人々に良く知られており、その語に関して多くの連想が伴いやすい語、または、多くの副義を担うような語が文法化の元となる語として供される傾向がある。

そして文法化の元の語と文法化した語の間には類似性や近接性のようなメタファー関係がある。両者は通常、品詞が異なっており、文法的な属性は全く一致しない。具体的な語を基に、連想を働かせて抽象的な意味を担う語を造り出すのは、有限の語彙を使って無限の心理的・抽象的な事象を表現するために必然的な人間の言語使用の在り方である。

文法化の元の語は具体的で身体的な内容のある基本語彙である一方、文法化した語は、抽象的で非身体的であり、それによって表される指示物が外界に存在しないという点では実質的な内容を喪失した意味を持つ。共時的文法化の段階においては、両者は、ある程度の抽象的な語彙の意味を共有する。

通時的文法化のプロセスは、語彙の意味を消失させていく歴史的な意味変化のプロセスである。幾世紀もの年月を経る中で、文法化した語はその意味を希薄化させ、具体的な言葉で言い換えられる語彙の意味を徐々に消失させていく。そしてついには語彙的に言い換え得る内容を全く持たない漂白化の現象が起こる。文法化した語の漂白化が起こるのは、このように、通時的文法化の後期の段階である。

文法化は歴史的な言語変化のプロセスを説明するために有効である。ある語について、その意味が不透明で、どのようにして成立したのか全く不明な場合は、それが共時的・通時的な文法化のプロセスを経た結果であることを表す。通時的文法化は音声的・形態的な言語の実体を徐々に消失する方向へと向かう。例えば、英語の *hardly* は *hærdeliche*, *hardeliche* (古英語) > *hardely*, *hardlyly* (中期英語) > *hardly* (初期近代英語～現代) のように、時代を追うごとに音声的・形態的な磨滅が進んでいった。ある時代の言語の共時的体系(言語構造)は、古い意味・用法と新しい意味・用法が共存している。そのため、その共時体系(言語構造)の複雑さを解明するためには、通時的文法化のメカニズムを分析することが必要である。文法化の理論は、言語変化における重層化の現象を的確に捉えるために役立つものであり、言語変化を説明するための指標となると考えられる。

## 注

(注1) 本稿の英文引用の後に続く日本語訳は、日本語訳の引用が明記されたもの以外は、全て筆者によるものである。

## References

- Blank, Andreas (1999) "Why do New Meanings Occur? A Cognitive Typology of the Motivations for Lexical Semantic Change" In Blank, Andreas and Peter Koch (eds.) (1999) *Historical Semantics and Cognition* Berlin, New York: Mouton de Gruyter, p. 61-89.
- Bradley, Henry (1924) *The Making of English* New York: The Macmillan Company (寺澤芳雄 (訳) (1982) 『英語発達小史』 東京：岩波文庫)
- Fortson IV, Benjamin W. (2003) "An Approach to Semantic Change" In Joseph and Janda (eds.) (2003), p. 648-666.
- Heine, Bernd (2003) "Grammaticalization" In Joseph and Janda (eds.) (2003), p. 575-601.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünemeyer (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago, London: University of Chicago Press.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2007) *The Genesis of Grammar: A Reconstruction*. New York: Oxford University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization* Cambridge: Cambridge University Press.
- Joseph, Brian D. and Richard D. Janda (eds.) (2003) *The Handbook of Historical Linguistics*. Malden, Mass.: Blackwell.
- Labov, William (1994) *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lehmann, C. (2002) Thoughts on grammaticalization. Second, revised edition. Arbeitspapiere des Seminars für Sprachwissenschaft der Universität Erfurt. Nr.9.  
(<http://www.db-thueringen.de/servlets/DerivateServlet/Derivate-2058/ASSidUE09.pdf>)
- Matisoff, James A. (1991) "Areal and Universal Dimensions of Grammatization in Lahu" In Traugott and Heine (eds.) (1991) , p. 383-453.
- Naumann, B. (2000) *Einführung in die Wortbildungslehre des Deutschen*. 3rd, revised edition. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. (石井賢治 (訳) 2008 『ドイツ語造語論入門』 東京：三修社)
- 岡村俊明 (1997) 『シェイクスピアの新語, 新語義の研究』 東京：溪水社
- Pfenninger, Simone E. (2009) *Grammaticalization Paths of English and High German Existential Constructions: A Corpus-based Study*. Bern: Peter Lang
- Takahashi, Mitsuko (2011a) "The Japanese Adverb *Kesshite*: Its Orogen in Warfare." Paper presented at the 20th International Conference on Historical Linguistics, National Museum of Ethnology, Osaka.
- Takahashi, Mitsuko (2011b) "Grammaticalization of the Japanese Adverb *Kesshite*." Paper

presented at the 44th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, Rioja Forum, Logroño, Spain.

Takahashi, Mitsuko (2012) "The Derivation and Historical Changes in Meaning of the Japanese Adverb *Kasanete*." Paper presented at the 45th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, Stockholm University, Sweden.

Takahashi, Mitsuko (2014) "Derivation of Abstract Words" *The Bulletin of Saitama Prefectural University* 15: 27-34

高橋光子 (2014) 『文法化についての共時的・通時的研究—日本語と英語の修飾語の分析—』  
博士学位論文 (お茶の水女子大学)

Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) (1991) *Approaches to Grammaticalization II: Focus on Types of Grammatical Markers*. Amsterdam: John Benjamins.

*Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM* (v. 4.0) (2009) Oxford: Oxford University Press.